

プロジェクト研究から 「交流及び共同学習の推進校の取組について」

児童生徒一人一人の資質・能力を育む交流及び共同学習（一年次）
～小・中学校の通常の学級と特別支援学級における実践研究～

1 はじめに

「交流及び共同学習」は、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が「共に学ぶ」教育活動です。「交流及び共同学習」は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする「**交流の側面**」と、教科等のねらいの達成を目的とする「**共同学習の側面**」の2つの側面があり、これらを**分かちがたいもの**として捉え、推進していく必要があるとされています。

我が国が目指す「共生社会」の実現に向けては、「心のバリアフリー」など、全ての人が相互に理解を深め合う取組が進められており、「交流及び共同学習」は、こうした取組の一環としてさらなる推進が求められています。

平成29年、平成30年に告示された小・中学校の学習指導要領においても、「障害のある幼児児童生徒の交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むようにすること」とあり、本県においても各校で取組が進められているところです。

本稿では、田村市と会津坂下町の2地区をモデル地区とし、令和3年度、田村市立滝根小学校と会津坂下町立坂下南小学校が取り組んだ「交流及び共同学習」の実践を通して得られた成果と今後の研究課題についてご紹介いたします。

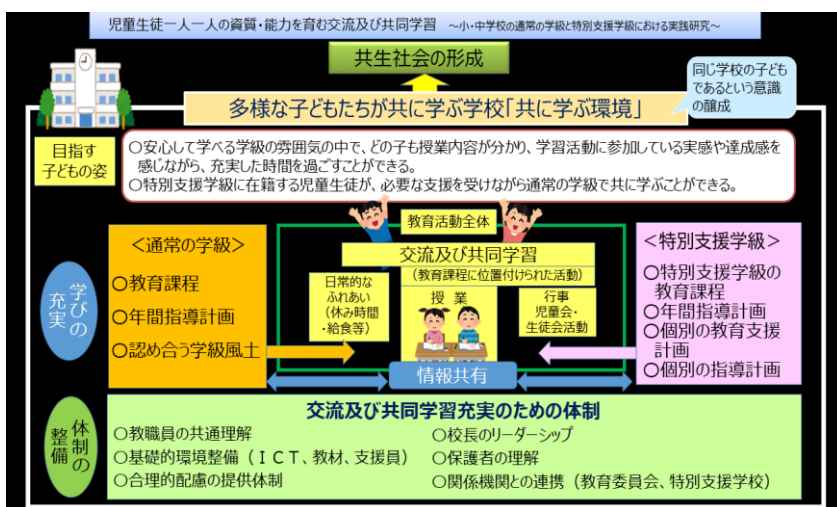
2 研究の目的

小・中学校での交流及び共同学習において、児童生徒一人一人の資質・能力を育むための効果的な指導及び支援の在り方を探り、『共に学ぶ』環境の構築を目指す。

本研究が目指すのは、共生社会の形成に向けて、多様な子どもたちが共に学ぶ環境を構築することです。社会性の育成や多様性の理解とともに、障がいのある子も障がいのない子も共に学ぶことの良さを感じながら、教科等のねらいの達成に向けた、「交流及び共同学習」の充実に図ります。

そのために、目指す子どもの姿として「安心して学べる学級の雰囲気の中で、どの子も授業内容が分かり、学習活動に参加している実感や達成感を味わいながら、充実した時間を過ごすことができる」「特別支援学級に在籍する児童生徒が、必要な支援を受けながら通常の学級で共に学ぶことができる」ことを掲げました。

こうした子どもの姿の実現のためには、「交流及び共同学習」の『学びの充実』と、それを支える『体制の整備』が重要であると考えます。(図1)



<図1 本研究で目指す「交流及び共同学習」>

3 取組の実際について

研究内容 1 小・中学校における「交流及び共同学習」の現状と課題の把握

(1) 実施検討協議会の実施

実施検討協議会を実施し、推進校・協力校の校長先生や特別支援教育コーディネーターから、各校の現状と課題についてご報告いただき、各関係機関と情報を共有しました。(図2)

推進校・協力校の先生方からは、「今までの交流及び共同学習は『交流の側面』を中心とした実践になっている。」「特別支援学級の児童の特性に応じた配慮の仕方に難しさを感じている。」「特別支援学級の児童生徒の中には、学習内容が理解できず、通常の学級での学習に行き渋りが見られる。」などの課題について意見が交わされました。

＜実施検討協議会＞	
【推進校（小学校）】	田村市立滝根小学校・会津坂下町立坂下南小学校
【協力校（中学校）】	田村市立滝根中学校・会津坂下町立坂下中学校
【当該市町村教育委員会】	
【研究アドバイザー】	宮城学院女子大学 教授 梅田 真理 氏
【当該教育事務所】	【福島県教育庁特別支援教育課】
【近隣の特別支援学校】	【特別支援教育センター】

＜図2 「実施検討協議会」構成員＞

(2) 特別支援学級担任からの聞き取り

各推進校で特別支援学級を担当している先生方に、交流及び共同学習の課題について聞き取りを行いました。挙げられた課題は、「学年が上がるにつれて教科の学習内容が難しいと話している児童がいる。」「交流先の先生方と情報交換をする時間の確保が難しい。」「教科の内容によっては、特別支援学級で学習した方が、効果が上がる場合がある。」「どの教科で交流及び共同学習を行うのか判断が難しい。」などがありました。

(3) 推進校・協力校でのアンケートの実施

	交流的側面	小学校計	中学校計	共同学習的側面	小学校計	中学校計
□特別支援学級の児童生徒	社会性が養われる	80.0%	73.0%	各教科等の学びが充実する	20.0%	27.0%
□通常の学級の児童生徒	多様性を尊重する態度が養われる	74.3%	54.1%	各教科等の学びが充実する	2.9%	2.7%
□教師	障がいのある児童生徒の理解が深まる	42.9%	37.8%	授業改善や指導力の向上が図られる	28.6%	16.2%
□学校	子どもの多様性が尊重される学校風土が醸成される	40.0%	40.5%	多くの児童生徒の各教科等の資質・能力の向上に資する	11.4%	8.1%

＜表1 「交流及び共同学習」に係るアンケート結果（一部抜粋）＞

「交流及び共同学習」の効果について、どのように考えているかについて質問した結果です。

特別支援学級の児童生徒にとっての効果については、小学校においては、「社会性を養うことに効果がある」という回答が80%と多く、「各教科の学びの充実を図ることに効果がある」という回答は20%に留まっています。通常の学級の児童生徒にとっての効果についての回答では、よりその差が大きくなっています。(表1)

これらの結果から、推進校・協力校において「交流及び共同学習」を進めるに当たって、「交流の側面」に効果があると考えている先生方が多いことが分かります。反対に、「共同学習の側面」で効果があるとの回答は少なく、特別支援学級の児童生徒が通常の学級で学習する難しさを感じていることが明らかになりました。

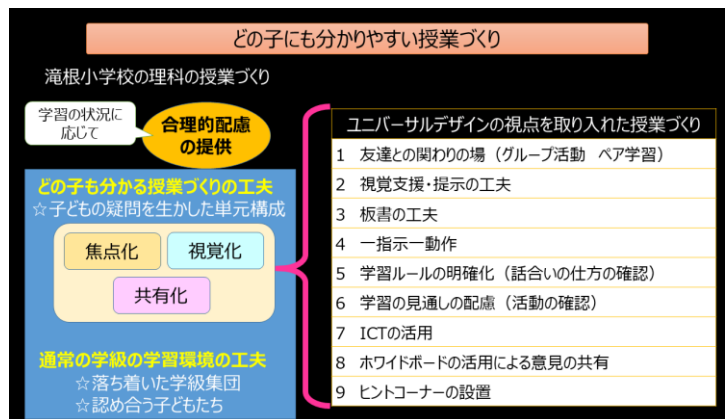
＜交流及び共同学習に係るアンケート＞	
【対象】	推進校・協力校 4校の全教員
【目的】	「交流及び共同学習」に関する先生方の意識や現状に関する調査を行い、今後の「交流及び共同学習」の推進に向けた課題を明確にする。
【内容】	自校の「交流及び共同学習」の実施状況について

研究内容2 児童生徒一人一人の資質・能力を育む「交流及び共同学習」の授業づくり

【田村市立滝根小学校の実践】

滝根小学校の「交流及び共同学習」では、「どの子にも分かりやすい授業づくりの工夫」に焦点を当て取り組みを進めています。(図3)

特別支援学級の児童だけでなく、全ての子どもたちが、それぞれ学びに向かうことができることを基本に授業づくりを行いました。「焦点化」「視覚化」「共有化」といったユニバーサルデザインの視点を取り入れ、単元構成や学習環境の工夫を行いました。



＜図3 滝根小学校の授業づくり＞

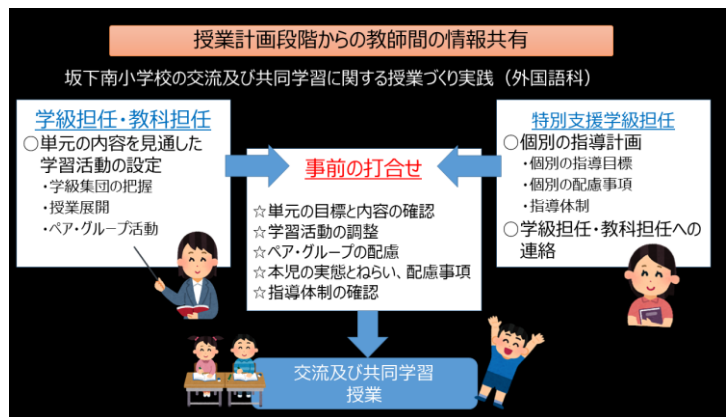
学習前には、授業の流れと対象児の教育的ニーズと合理的配慮を確認し、対象児が意欲的に学習活動に取り組めるようにしました。授業にあたっては、支援員が、対象児を見守りながら、必要に応じて声を掛けたり、手掛かりとなる支援ツールを提示したりしました。学習後には、通常の学級の担任が行った評価や授業での様子を情報交換したり、学習内容を特別支援学級でも復習したりするなど、教師間で連携して指導の充実を図りました。

本事例を通して、ユニバーサルデザインの視点を取り入れ、集団全体に対する学習環境への配慮を行うことが、特別支援学級の児童はもちろん、多くの児童の学びを支えることになり、自然な交流と学習につながる事が確認できました。

【会津坂下町立坂下南小学校の実践】

坂下南小学校の「交流及び共同学習」の授業づくりでは、授業計画段階から教師間の情報共有を行う「事前の打ち合わせ」を大切にしています。(図4)

教科担任からは、単元の内容を見通した上で、学級集団の把握や大まかな授業展開、ペア・グループ活動について、特別支援学級担任からは、対象児が学習面での遅れも見られていたことから、単元の目標を踏まえつつ、対象児が達成可能な「個別の目標」「個別の配慮事項」の設定などについての話題が挙げられ、情報を共有しました。



＜図4 坂下南小学校の授業づくり＞

個別の目標を達成するには、本人が安心して授業に臨める環境や準備が必要なことから、学習前の配慮、学習中の配慮、児童の状態に応じた全体に関わる配慮を明確にして授業に臨みました。

特別支援学級には、対象児のように集団参加が難しい児童もいますが、友達と一緒に学ぶことが大きな学習刺激になり、学習内容に興味をもったり、「分かった、できた」という満足感や達成感を味わったりする機会になることも考えられます。

無理に参加するのではなく、良かった瞬間を積み重ねられるように、参加することの効果を見極めて、計画に基づき柔軟に対応していくことが大切であることが分かりました。

研究内容3 小・中学校における「交流及び共同学習」の組織的・計画的な取組

「交流及び共同学習」の実施に当たっては、関係する学級だけではなく、学校全体での理解や体制づくりが必要であることから、推進校や協力校において、「交流及び共同学習」の必要性や校内体制づくりについて研修を行ってきました。

各推進校においては、通常の学級や特別支援学級の担任、支援員との連携を密にして、特別支援学級の児童が通常の学級で学ぶときに必要な支援や適切な指導について検討し、授業に生かしてきました。

また、研究公開を実施し、地域の幼稚園、保育所、小学校、中学校の先生方に授業を参観していただくとともに、授業者や管理職を交えたパネルディスカッションを行い、本研究について周知を図りました。参加された先生方からは、「特別支援学級の児童が安心して通常の学級で学べる雰囲気大切である。友達と関わりながら児童同士で学び合う姿が見られた。」「授業者・担任・支援員が手立てや情報を共有して授業に臨んでいる。特別支援学級の児童の学びを見取って必要な支援が行われていた。」等の意見・感想が寄せられました。

4 成果と今後に向けて

成果として、「交流及び共同学習」の充実に向けたポイントを、以下の4つに整理することができました。

- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
- ・合理的配慮の提供
- ・教師間の情報共有と連携
- ・実態に応じた計画と柔軟な対応

今後、「共同学習の側面」を充実させるため、2つの点に取り組むことが必要だと考えます。

<学びの充実>の視点について

1点目は、「共同学習の側面」に焦点を当てた実践事例を波及することです。今後も、様々な実践に取り組み、参考となる「交流及び共同学習」の事例について発信していきたいと思えます。

2点目は、特別支援学級の児童生徒の実態に応じた適切な目標や評価の在り方についての検討です。各教科等の学習状況を的確に捉え、関係者間で学びの状況についての検討を重ねることが、授業の改善につながると考えます。

<校内体制の整備>の視点について

児童生徒の情報共有を、いつ、どの程度行えているか等の現状把握を行うとともに、現在行われている会議等の校内システムを有効に活用したり、情報共有のためのツールを活用したりするなどの校内体制をどう整えていくか、検討が重要であると考えます。

また、特別支援学級の教育課程や、個別の教育支援計画・個別の指導計画を踏まえた、計画、実践、評価・改善のプロセスを整理する必要があると考えます。

5 おわりに

1年次の成果と課題から、2年次には、推進校・協力校において「どの児童生徒も教科の目標が達成できる授業づくりの実践と、それを支える校内体制の整備」を目指し、推進校・協力校・関係機関とより一層、連携・協力して、研究を推進してまいります。そして、その成果について広く周知を図り、各校で行われる「交流及び共同学習」の充実に寄与していきたいと考えております。